

平成22年度 学校自己評価表中間評価

中長期目標 (学校ビジョン)	「倉吉東高のかたち」の理想に沿って、本校の教育活動を更に充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。		今年度の 重点目標	1 学校文化度の向上と地域からの信頼向上 2 学校教育力の向上 3 進路指導の充実 4 専攻科教育の充実 5 定時制教育の充実
-------------------	--	--	--------------	---

年度当初					評価結果(9)月		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1. 学校文化度の向上と地域からの信頼向上	規律ある生活と「文武両道」による自立の促進	・校内に品位と落ち着いた爽やかな雰囲気を感じられる。 ・生徒自身が環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。 ・全員が部活動に加入し、積極的に活動するとともに、切り替えを上手に行い、勉学に励んでいる。 ・自分の置かれた立場や場面に相応しい言動ができる。 ・教員に「率先垂範」の姿勢が浸透している。	・集団生活を行う上での基本的マナーが身につけていない生徒が一部にいる。 ・清掃等の場面で主体性に欠け、受け身の態度で行動する生徒が見られる。 ・部活動の加入率が高いが、一部にけじめのある活動ができてない部がある。 ・学校生活の中で時として集団の和を乱す生徒がいる。 ・生徒に自ら範を示そうという姿勢が浸透しつつある。	・機会を捉えて指導・面談を繰り返すことにより、指導7項目を遵守させる。 ・TEAS(鳥取県版環境管理システム)LHR等で生活環境委員会が主体となって生徒自身が環境整備に主体的に取りくむ意識を高める。 ・部顧問・外部指導者・担任等が連携し、文武両道が実現されるよう働きかける。 ・粘り強く個別指導を行い、自己の責任と集団に与える影響について自覚させる。 ・職員が「倉吉東高のかたち」の実現に向けて、それぞれの取り組みを職員研修等で情報交換することにより、目指す方向性を共有する。 ・学びの主体性を育成するための研究を組織的継続的に行う。	・基本的マナーが身につけている生徒が多く、物事の是非を的確に判断して行動できるようになってきた。 ・一部の生徒ではあるが、服装の乱れや自転車の乗り方などマナーの悪さがみうけられる。 ・清掃等の場面で積極性のない生徒が見られる。 ・6月に部活動外部指導者会を開催し本校における文武両道の精神に対する理解を求めた。 ・部活動と学習の切り替えがうまくできていない生徒がいる。 ・教員の姿勢は、概ね生徒の模範となっている。	B	・継続して機会を捉えた指導・面談を行っていく。 ・LHRで、ルールやマナー、自分の置かれた立場や場面に相応しい言動について考えさせる時間を持ち指導する。 ・生活環境委員の活動によって、清掃活動や環境整備に取り組むよう生徒の積極性をより高めていく。 ・顧問の協力も得て、生活と学習と部活の関連性を理解させるよう努める。
	中高連携の強化と高大接続の円滑化	・各中学校に本校の教育方針や教育内容が十分理解され評価されていると同時に、本校も各中学校の実態を十分理解している。 ・生活指導・学習指導について、中学・高校の連続性がある。 ・中学教育を支援するため、本校が持つ資源を積極的に提供している。 ・生徒が、単に大学に合格するための学習を越えて、生涯にわたる学習の基礎となる重厚な学びを行っている。 ・職員の誰もが本校の目標や実態を外部の人に説明できる。	・本校の教育方針・教育内容・生徒指導などについて、中学校教員や生徒、保護者の理解が不十分な点がある。 ・数学、体育以外の教科について連携があまり見られない。 ・高大連携について、英語(鳥取大学)以外は、大学紹介のレベルで終わっている。 ・年に数校大学訪問に行き、大学情報の把握と職員への提供を行なっている。	・分掌担当の教員を中心に、全職員でHPの更新を行い、中学生向けの情報発信を充実させる。 ・高校説明会で本校に来た生徒に対し、チューターを中心に多くの在校生が説明を行ない、生徒の視点で倉吉東高の魅力を伝える。 ・中学生特別講座への参加拡大を促進すると同時に、中学教員の参加(参観、T-Tなど)を呼びかける。 ・中学校出前授業に積極的に応じる。 ・中学校説明会・進路学習の機会を利用して、教員が積極的に中学校に出向き、本校の理解が深まるよう工夫する。 ・本校へ学校訪問等に来られた外部の方への説明を、進路指導部や教務部以外の教員も行い、本校の取り組みを外部に発信する能力の向上に努める。 ・大学教育の研究を進め、本校教育と連携できる内容を検討し、教員や生徒の参加体験受講を実施する。	・HPの更新のための職員研修を行い、分掌担当職員中心に最新の情報が提供できるようになり、前期で約9万件のアクセス数があった。 ・中学生体験入学では在校生が生徒の視点で説明を行い、倉吉東高の魅力を伝えることができた。 ・中学生体験入学時の英語体験授業は好評であったが、特別講座の参加者は52人にとどまった。 ・中学校出前授業に音楽、英語が出かけた。 ・中学校説明会には、管理職以外の教員も多数出向き、本校の魅力にについて発信できた。 ・本校へ学校訪問等に来られた外部の方への説明を、進路指導部や教務部以外の教員も行い、本校の取り組みを外部に発信する能力の向上に努めた。 ・3年生は、学年を追うごとに生涯学習につながる学びの姿勢が身につく、生活態度も向上してきた。 ・図書館ゼミ等で大学教授を招き講演会を行った。生徒は知的刺激を受け、学習意欲の向上が見られた。	A	・中学生が興味関心を持つよう、できるだけ写真つきで毎日HPの更新をする。 ・学年団で各中学校へ説明にでかける機会をつくる。 ・本校教員による中学校の授業参観や、中学生の高校訪問に対しては積極的に応ずる。
2. 教育力の向上	教科指導力の向上と教員研修の充実	・教員一人ひとりが、高い教科指導力を持ち、授業を通して各教科の魅力や奥深さを生徒に伝えている。 ・テストや大学受験といった実利的目的を越えて、生徒の学びが真理探究といった高次なものとなるよう指導が行われている。 ・生徒の進路希望や発達段階に応じて、教師が集団として時宜にかなった教科指導を行っている。 ・指導力を高めるための教員研修が積極的に行われ、その成果が日々の学習指導に還元されている。	・生徒の学習が内発的・主体的なものへ高まっているとは言えない部分がある。 ・生徒の学習が課題提出やテストなどに追われている傾向が依然としてある。 ・生徒個々の進路志望や発達段階に応じたきめ細かい教科指導を教員集団全体として十分に行えているとは言えない部分がある。 ・教員研修の成果が日々の学習指導に十分に還元されていない。	・「授業で勝負」の精神を教員間で確認し、魅力的な授業を行うための教材研究や工夫を行う。 ・魅力的かつ効果的な授業を行うために、教科内はもちろん、他教科の授業相互参観を実施する。 ・年2回実施する生徒による授業評価アンケートの項目について見直しを行い、生徒の状況の把握や教員の授業に対する客観的評価ができるようなものにする。 ・授業評価アンケートの結果分析をより詳細に行う。 ・教科指導先進校教師招聘事業を積極的に実施し、事後の研究会を通して教科全体の指導力向上を図る。 ・予備校派遣研修を行い、研修報告書を作成し、活用できる指導ノウハウを教科会で共有化し、日々の学習指導で生徒に還元する。 ・定期考査、進路指導テストなどの問題作成において協議・検討を行い、学習到達度を確保するとともに、3年間を見通した教科指導を行う。 ・本校で計画、実施している様々な指導力向上プログラムが効果的に機能するように研修部を中心に随時チェックし、機能するように工夫する。	・他教科の授業も含め、授業相互参観を5～7月にかけて実施。積極的な参観ができた。 ・授業評価アンケート(前期分)を6月に実施した。昨年の評価よりも概ね良好である。 ・授業評価アンケートの項目の検討を行った。 ・教科指導先進校教師招聘については県教委と連携を取り、数学科で後期に計画実施の予定。 ・予備校派遣については夏休み中に4名派遣し、夏休み課外や授業で得たノウハウをすぐに生徒に還元している。 ・定期考査や進路指導テストなど教科内で問題作成についての活発な協議・検討が行われている。 ・全体の研修計画が効果的に機能するように各方面と連絡・調整を行いながら運営を行っている。	B	・授業評価アンケートの集計・分析結果を教員間で共通理解し、評価が高まってきていることを自信として後期以降も引き続き授業改善に取り組んでいく。 ・予備校派遣についても今後も可能な限り派遣する。 ・問題作成については教科会を中心に活発な協議・検討を継続していく。さらに3年間を見通し、学習到達度を意識した教科指導を行う。教員のベクトル合わせを行う。

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	後期にむけての改善方策
3. 進路指導の充実	教員の進路指導（進路目標を見据えた生き方指導）力の向上	・進路指導が単なる「出口指導」に終わることなく、生徒が「学力＝生活力」であることを自覚しながら、その意識が「今・自分・権利」だけでなく、「将来・社会・責任貢献」へと開かれるような、生き方指導を行っている。 ・生徒の志望と適性を理解し、生徒にとっての望ましい方向性をイメージしながら、3年間のどの段階においても適切な助言を行っている。	・3学年の指導の重要性を理解する教員が多くなった半面、低学年時の進路指導においてキャリア教育の観点でとまどう場面もある。 ・3年間を見据えた系統的な教科・進路指導計画を立案し実行しているが、各時期において十分な達成度が得られていない場合がある。また今のことで精一杯となり、将来への意識を持つことができない生徒もいる。 ・生徒の志望や適性を理解するために教員と生徒との面談を随時行っている（クラス担任、分掌主任など）。しかし学年・教員により多少の情報量の差がある。	・学校訪問対応、中学説明会対応等の機会を研修の機会とし、多くの教員がその役割を果たす。 ・新旧3・専担任会や判定会等を進路研修会として学年の枠を超えて引き継ぎや内容を共有し、本校の進路指導の指針を明確化する。 ・志望校決定のLHRだけにならないよう、キャリア教育の視点で進路LHRを計画・実践する。 ・読書・小論文指導を重点指導項目とし、生徒が現代社会を考察し語れるようになるよう、小論文活動を推進し支援する力を養う。 ・3年間を見据えた教科・進路指導を効果的に行うために、綿密な学年会を行い、生徒との面談や家庭学習調査、各試験結果分析などを通して得た情報を教員間で共有し、個々の生徒への指導をきめ細かく行う。 ・全教員参加の研修会を随時行い、同じ方向性で組織的な指導が実践できるようにする。 ・全国的な情勢を掴むために、適切な時機をとらえて教員・生徒・保護者に対して様々な研修会を実施する。	・新旧3・専担任会や第1回判定会では、学年を越えた参加者が多くあり、担任に面接等の指導結果を細かく報告してもらうことによって、引き継ぎや進路指導内容を共有することができた。 ・読書講演会を実施し、生徒・職員とも読書と想像力の関係について共有した。 ・小論文指導においては、生徒向けに全体講演とミニ講座、職員向けの研修を実施し、小論文を書く力や品評会が充実し、「志在千里」に載せる優秀作品の質も向上した。 ・学年会では、各教科や進路部とも連携し、クラス間で生徒への指導に差が出ないよう留意するとともに、学年団全員が全生徒の情報を共有しながら指導した。 ・8月に進路講演会を全校生徒と保護者向けに行い、全国的な情勢の把握と3年間を見通した学習、進路意識の向上に繋げることができた。	B	・引き続き進路判定会や進路検討会を職員研修の場として活用する。 ・講演会や研修会で生徒が得たものを継続できるよう、各教科で刺激となる教材を定期的に与える。
	国公立大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・現役合格者数150名。 ・ブロック大学レベル以上合格者数現浪合計70名。	（現役合格） ・昨年度175名。一昨年度126名。一昨々年度138名。 （ブロック大学レベル以上合格者数） ・昨年度83名。一昨年度55名。一昨々年度51名。	・授業、放課後学習、家庭学習の差異化をはかり、それぞれの学習の意味づけや関連づけを面接を通して伝える。 ・生徒の学力実態を正確に分析し、遅進者指導を迅速かつ手厚く行う。 ・志望校合格実現への面接は、担任だけでなく教科担当も関わり、生徒1人1人が何をどう学習すべきか具体的に支援する。 ・教員は校内・校外模試の意義を理解し、生徒に常時伝えるとともに、保護者に対しても学年通信やホームページを通じて伝達する。 ・各学年、各時期の到達目標偏差値を確実に達成する。	・3年生においては、年度当初から英語の課外を実施し、多くの生徒の苦手意識が克服されつつある。 ・夏の大山合宿では、教養類型126名が参加し、卒業生や職員とともに、集団で学習することの重要性を理解した。夏休み明けの学習会では参加する生徒数が増えた。	B	・3・専合同課外等を通しグレード別の教科指導を密に行い一層の学力向上を目指す。
	難関大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・現浪合計20名以上。 ・東京大学5名。	（難関大学） ・昨年度33名。一昨年度17名。一昨々年度12名。 （東京大学） ・昨年度4名。一昨年度2名。一昨々年度1名	・各教科で、昨年度の実績や指導法を確認伝達し、効果的な指導法は継承していく。 ・各教科で大学入試問題研究を充実させ、各志望レベルに応じた学力育成プログラムを作成し、授業や課外に即反映させる。また、適宜教科面談を実施し、個に応じた適切な情報提供や進路指導・学習指導を行う。 ・OBや専攻科生を利用し、実績ある先輩の学習法や心構えを下級生に伝える。 ・明確な目的をもった文理学術クラス検討会を定期的開催し、一貫した指導を行う。	・2年生では、県の企画する難関大合同合宿や近県高校との合宿で、難関大を志望する意義や学習法を学び高い刺激を受けることによって意識が向上した。 ・3年の学術類型のクラスに、卒業生の難関大進学者を招いて、経験を語ってもらった。進路のしおり等活用や身近な先輩の成功例を聞くことによってクラス全体が難関大に向かう雰囲気になった。 ・9月より3年生と専攻科の合同課外を実施しており、難関大志望者も現浪が切磋琢磨する環境で学習している。	B	・夏休み以降3・専合同課外を軸に集団化はできたが、引き続き志望、出願、受験、合格の段階で教科の温度差ができぬよう適切なサポートをしていく。
4. 専攻科教育の充実	鳥取県の専攻科として信頼される専攻科	・県内各地から集まった生徒一人ひとりが県立の専攻科である意味を理解し、学問に対して誠実に主体的に取り組むことに加え、公共の利益に資する精神を涵養している。 ・生徒一人ひとりの学力差に応じたきめの細かい指導により、潜在能力が引き出され、難関大学合格者が増加している。 ・広く県民から専攻科の存在価値が認められている。	・県の専攻科として幅広く認知され、中部地区の高校だけでなく、東部地区、西部地区の高校卒業生も入学している。 ・専攻科志願者が、4年続けて定員を2桁以上上回っている。 ・鳥取県立の専攻科で学べる意義を認識させ、大学に合格すればよいという考え方でなく、真の学びを各自に自覚させている。 ・近年順調に実績を上げている。今年度は、東京大学に2名をはじめ、名古屋大学、大阪大学などの難関校に合格者を出している。 ・今年度、本校の専攻科の存廃の決定がなされることになっている。	1. 学びに向かう姿勢づくりを企画し、自ら発信する学びを実践させる。 2. 「見る・聞く」を中心とした学びから、「話す・書く」ことを中心とした学びに転換していく。 上記1. 2. の具体的内容として ・始業前(8:00～)の早朝学習を行う。 ・「学び祭り」を実施(7月)し、各自が発表テーマを設定・研究し、プレゼンテーションを行う。 ・あらゆるジャンルの書籍の読書をすすめていく。 ・生徒が新聞記事の選定、論述を、ルーム日誌に表現させ、自己の意見を表現させる。 ・志望校別指導(基礎力未定着者、超難関校志望者)に対する指導を放課後課外、休日課外などを利用し、全教員によるバックアップで行う。 ・3年生と専攻科生の合同学習会 志望大学別課外などを実施する。	・鳥取県の専攻科であることを自覚し、感謝の気持ちをもって主体的に学習している。 ・「学び祭り」を実施し、様々なテーマに対してプレゼン、質疑応答することにより、広い視野で、深く学問を探究する姿勢を身につけることができた。 ・服装、清掃、時間の厳守など、生活習慣の確立が学習活動を支えるものであることを指導してきた。最初は指導に戸惑いもあったが、生活環境にも慣れ、新たな生活リズムを作りだしている。 ・始業前早朝学習に、8割の生徒が参加し「互いに学びあえる空間」であると感じるようになった。 ・自ら学び、発信する力を培うために、「読書のすすめ」「ルーム日誌を使った論述」によって、テーマ設定・論述する力が向上し、他の生徒のテーマや文書に目を向けることによって視野を広げることができた。 ・志望に関する指導は、生徒の心の動きに対応しつつ、本当にやりたいことは何かを中心に指導してきた。また、個々の学力に応じた添削や放課後・休日課外を実施した。 ・三年生との合同課外は、緊張感をもって取り組み、生徒の大きな刺激となっている。また、現役生に強い刺激を与えた。 ・県議会の視察があり、現在の本校の取組に一定の評価を得た。	A	・生活習慣が確立できない生徒に対して、面接や家庭との連絡をとることによって、不安な心を取り除く。 ・継続してルーム日誌を活用し、「生徒自らが学び発信する力」を高める。 ・生徒の志望校決定には、前期で時間をかけてきたが、現在までの成績の伸び具合で志望校にも変化が起きると考えられる。決して弱気にさせず、生徒を元気づけるよう今後の学習計画など個別の指導を続けていく。
5. 定時制教育の充実	退学者・休学者の減少	・教員連携及び家庭との連携が強化され、退学者・休学者が減少している。 ・生徒が規律とけじめのある基本的な生活習慣を確立している。 ・進路保障の観点からわかりやすい授業が行われ、生徒の基礎学力が定着している。	・休学者0からのスタートであるが、さまざまな事情により支援や指導を必要とする生徒が多い。 ・はっきりとした進路意識が乏しく、学力面で厳しい生徒も少なくない。	・職員連携を密にし、生徒個々をよく理解し、保護者と連携して機会をとらえ粘り強く指導する。 ・要点をまとめたプリントや練習問題集を活用し、基礎学力の定着に努める。 ・積極的に中学校へ出向き、中学生に進路目的を持って入学するよう働きかける。	・職員連携を密にし、保護者と連携して粘り強く指導している。特に、特別支援の必要な生徒には全職員できめ細かく指導に当たっている(B+)。 ・さまざまな工夫をし、基礎学力の定着に努めているが、手厚く粘り強い指導が一層必要である(B-)。 ・中部の各中学校へ「学校案内定時制課程」を持って行ったり、HPを更新して、定時制について情報を提供するように努めている(B+)。	B	・生徒一人一人の状況を把握し、面談等を通じて、粘り強く指導する。

○ 評価基準

A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80％以上になっている。

B 課題はあるが、改善に向けた取り組みが効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、50％～80％の範囲内になっている。

C 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。一定の成果が上がっているが、課題も多く、今後の改善があまり見込めない。数値的目標を掲げた項目では、最高でも50％未満である。